

山本佳奈.『残された小さな森—タンザニア 季節湿地をめぐる住民の対立』昭和堂, 2013年, 232 p.

生方史数*

本書を読んで、海外をはじめ自分で調査した時のことを思い出した。タイの調査地からバスで移動中、川岸に広大な「未利用地」が横たわっていることに気づいた私は、人々がこの土地を開拓しないのはなぜだろうと疑問に思っていた。のちに私は、そこは季節湿地で開発が困難な場所であったこと、そして、そのような場所も大なり小なり住民と関わりがあり、安易に「未利用地」などと呼べる場所ではないことを知った。

本書の舞台であるタンザニア・ボジ高原の季節湿地も、おそらく外部の人間からみれば、単なる「未利用地」として見過ごされてしまうだろう。なかには、開発すべき土地だと一方的に断じる人もいるかもしれない。しかし、本書を読めば、そのような外部者の認識がいかに浅薄で、ときに傲慢なものであるかが理解できる。人々の生活世界は、外部者の想像以上に精緻なものなのである。

とはいえ、生活世界も状況に応じて変容する。土地不足やグローバル化などの影響を受け、季節湿地の耕地化が進みつつあるという。本書は、そのような湿地の耕地化が進行するプロセスを、ニイハを中心とした住民の主体的な対応や交渉のなかで捉え、「新たな生態・社会環境の中で地域の共有資源が再定

義されていったプロセス（まえがき）」として描き出そうとする試みである。

本書は、9つの章から構成されている。序章では、本書の課題と方法が、アフリカ研究やコモンズ論と関連づけてまとめてある。第1章では、本書のテーマが濃縮された出来事として、イテプーラ村の季節湿地にある小さな「孤独の森」の話が紹介される。その開発をめぐるいかに住民が対立し、どのように折合いがつけられたかが、ニイハ社会の文化的背景とともに記述される。第2章から第6章にかけては、第1章でみた出来事が生じる背景が、人と自然との関わり（第2章）、農業の変遷（第3章）、季節湿地の環境と利用（第4章）、コーヒー園の拡大（第5章）、ウシの飼育（第6章）というように、生活と自然に関連するさまざまな側面から分析される。

そして、第7章で改めて本題に戻る。「行き過ぎた耕地化」の反動として、一旦耕地化された湿地が放牧地に戻されたシウイングガ村の事例が述べられる。そこで、タンザニアの土地法とニイハ社会の土地所有制度の変遷をみながら、湿地の開発と保全をめぐる住民の対立と話し合いの経緯を分析することで、ローカル・コモンズの管理における住民の役割について考察し、終章における総合的な考察につなげている。

本書の主な論点は、終章にまとめられている。ここでは、湿地で耕地が拡大した経緯と背景、共有資源をめぐる対立と和解のプロセス、アフリカ農村におけるローカル・コモンズの3点について概略を述べておきたい。

* 岡山大学大学院環境生命科学研究科

かつて、ニイハはアップランドのミオンボ林を利用した焼畑農耕を主な生業としていた。20世紀以降は人口増加やコーヒー栽培の普及により、焼畑から常畑への移行が進み、林はトウモロコシ畑やコーヒー園に置き換わった。この過程で、住民の食糧生産には農業資材が必要になり、コーヒーが換金作物として不可欠な存在となった。一方で、季節湿地は、一部が草地休閑焼畑（イホンベ）と灌漑畑（ピリンピカ）の場として供されるほかは、ウシの放牧地として利用される共有資源であった。ウシは、ニイハ社会では一種の威信財であり、婚資への利用など重要な価値を有していた。

しかし、1980年代以降、コーヒー栽培のさらなる拡大や農地の分割相続などによって、アップランドの食糧生産用農地が不足するようになった。このような耕地不足に直面した住民が、1990年代以降灌漑畑の水路掘削や畝立て技術を応用し、湿地でトウモロコシ畑を栽培するようになっていった。

この湿地トウモロコシ畑の拡大は、共有資源であった季節湿地の全面的な囲い込みを意味する。よって、湿地開発はウシの放牧地利用との競合を生む可能性があり、現にある程度の対立が生じた。しかし、湿地開発が行なわれた時には、ウシの飼養は実際には耕地需要とそれほど競合する存在ではなくなっていた。牛耕が普及し、牛の価値が「富の象徴」から役畜としての「労働力」へと変容するとともに、繁殖を外部地域に依存するウシの更新システムが発達したことで、ウシの所有が分散し、限られた土地でも放牧が可能になっ

たのである。

以上が、湿地が耕地化した背景と経緯に関する著者の分析である。一見変容の条件が整っているかにみえるが、現実には「共有資源には多様な価値が存在し、住民と資源との関わりも一様でないため、利用形態が変動する過程では様々な軋轢が生じる（p. 203）」。著者によれば、そこには共有資源をめぐる以下のような対立と和解のプロセスがあった。

共有資源である季節湿地には、人々の間で「ウシのための土地」という共通認識が存在していたものの、利用に関する明確な合意は存在しなかった。そのような状況下で、イテプーラ村で湿地開発の推進者が祖霊信仰の対象であった森を伐採するという事件は、「放牧地」「神聖な森」などの従来の湿地の価値と「耕地」という新たな価値の衝突を招いた。しかし、この対立は、湿地トウモロコシ畑の有益性が広く認められるにつれて徐々に沈静化した。「経済状況に後押しされた住民の先駆的な行動（p. 204）」が慣習を打破する契機となったのである。村では、小さな森を含む一部の放牧地は残されることになったが、それ以外の湿地は開発された。

一方で、シウインガ村では、村の行政官が、既に断片化されていた放牧地を住民に分譲したことから、土地を購入した世帯とウシを放牧している世帯との間で対立が起こった。村評議会での調停は不調に終わり、住民の働きかけに応じて県行政が介入した。その結果、係争地が元の放牧地に戻されることになり、事態は収拾に向かったのである。著者はこの事例を、「公」「共」「私」が地域資源

のどの部分にどう関るのかについて明確な指針がないなかで、「住民の内発的な動きを基盤としながら、地域資源の管理・運用に行政が関与していく (p. 205)」環境ガバナンスのひとつのあり方として評価している。事例を踏まえ、著者は、土地や資源が稀少化した現代アフリカ農村におけるコモンズ管理のあり方について議論している。

まず、シウィング村で共有地が確保された背景として、著者はウシの役畜としての公益性に着目する。ウシは個人の資産だが、所有者以外の人々もウシの畜力に依存しているため、住民は間接的に放牧地の恩恵を受けている。このような公益性の存在が、コモンズを維持する重要な要因となるという。また、和解と対立のプロセスを経て、湿地は「放牧地」として再評価され、もはや「余った土地」ではなくなった。つまり、残された湿地は地域住民の認識が深まった新しいコモンズとして質的に変化したという。換言すれば、そのような変質を導き出した住民による再定義プロセスそのものが重要であり、このプロセスがコモンズ維持の方向に働くために重要な要因のひとつが、公益性だということなのだろう。

以上が本書の概要である。特筆すべきは、フィールドワークを通じて地域で起こっている出来事をトータルに理解しようとする姿勢である。著者の行なった調査は、水環境や植生などの自然科学的なものから、家計調査や資源をめぐる交渉の追跡といった人文社会科学的なものまで多岐にわたる。このような地域研究者としてのホリスティックな姿勢

は、結果的にコモンズの利用と管理を立体的にみる姿勢につながっている。

これまでのコモンズ研究は、水や森林など、特定の資源における管理制度に着目してなされることが多かった。しかし、本書は季節湿地のみに着目するのではなく、それを取り巻くさまざまな土地利用を射程に入れ、住民の生活体系のなかで季節湿地の変容を捉えようとしている。その結果、コモンズの変容を、単にコミュニティを一括りにした記述やボズラップ流の稀少化への対応としてではなく、それらの分析がこれまでブラックボックスにしてきた、生活の諸側面にまたがった個人や社会の調整過程として描き出すことに成功している。

一方で、各章で展開される多様なディシプリンが、本書のなかで必ずしも十分には統合されていないように思われる。たとえば、第2章や第4章で分析される自然科学的な知見は、それぞれ興味深いものの、全体の論旨にはあまり関ってこない。これらの情報が、地域を「厚く記述する」ことに貢献していることは確かだが、かえって論点をぼやけたものにしてしまっている感も否めない。

その最たる点が、調査地およびアフリカのコモンズの何が問題なのか、コモンズをどうすべきなのかといったメッセージがあまりみえてこないことである。コモンズ論は、元来資源管理を念頭に置いた規範的・政策的な議論である。したがって、共有資源の変容をコモンズ論の文脈で実証的に論じる場合、同時にその規範的な立場もある程度表明しておかなければならないのではないだろうか。本書

の場合あえていえば、コモンズの管理という政策の方向に基本的に共感しつつ、コモンズをめぐる住民の交渉を、「有限・有益な資源を平和裏に、そして持続的に利用しようとする地域住民の潜在的な能力 (p. 8)」として生かすには何が必要かということになるのかもしれない。しかし、本書の分析は、そのような疑問に必ずしも十分に答えているとはいえない。たとえば、シウィング村の事例で、県行政が介入の際にとった姿勢は、事態の行方を決定的に左右する要因であったはずである。県の判断は、本書で述べるように住民の「交渉術 (p. 197)」の成果としてなされる場合もあるが、行政の方針を貫徹するためになされる場合もある。何が両者を分けるのであろうか。

アジアや日本の事例から考えると、現在のコモンズ管理の主な論点は、住民参加によって「政府の失敗」をいかに防ぐかという従来の議論から、住民同士では解決の難しい「コミュニティの失敗」に対してどのような「協治」の道筋がありうるかという方向に移りつつあるように思える。つまり、いかにコモンズ論を超えるかが重要になっているのである。本書がコモンズ論の文脈でより意義のある主張を展開できるとすれば、ひとつにはそのような方向があるかもしれない。また、住民によって再定義された「新しいコモンズ」が、資源管理上、あるいは人々の生活の持続的発展にとってどのようなレジームであり、どうあるべきなのかという問いも重要である。本書の自然科学的な分析がそのような方面で生きてくれば、文理の融合した立体的な

コモンズ論を構築できるかもしれない。

地域の実態をモノグラフとして描く際に、その内容からある論の文脈で何がいえるのか、頭を悩ませることがよくある。地域の詳細な記述と鋭い議論との間には、どうしても隔たりが生じてしまいがちである。両者をつなげるのは容易なことではないが、地域研究の新たな地平を開くためには必要なことではないだろうか。

遠藤聡子. 『パーニュの文化誌—現代西
アフリカ女性のファッションが語る独自
性』昭和堂, 2013年, 240 p.

金谷美和*

本著のタイトルにある「パーニュ」とは、「工場生産の更紗」のことである。パーニュは、幅約1メートル、長さ5.4メートルで販売され、3等分した大きさが巻き布になるという。西アフリカの女性は、パーニュを巻き布として身にまったり、パーニュで仕立てた衣服を着用している。著者の研究の発端は、初めて西アフリカを訪れた際、女性たちが着用していた色鮮やかで装飾の凝らされた衣服に驚いたことにある。

著者は、「西アフリカの女性たちの衣服が、なぜこのように独特なのか」という問いをたてた。著者の考える現代の衣服文化の傾向は、「世界中の服装が洋服に統一されたかに見えるほど顕著な近代化、西欧化」であり、「西欧化がすすむ現代の衣服文化において、

* 国立民族学博物館